

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2022年11月11日
【四半期会計期間】	第33期第2四半期（自 2022年7月1日 至 2022年9月30日）
【会社名】	株式会社インターワークス
【英訳名】	Interworks, Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 松本 和之
【本店の所在の場所】	東京都港区西新橋一丁目6番21号 NBF虎ノ門ビル8階
【電話番号】	03-6823-5400（代表）
【事務連絡者氏名】	財務経理部部长 清水 寛
【最寄りの連絡場所】	東京都港区西新橋一丁目6番21号 NBF虎ノ門ビル8階
【電話番号】	03-6823-5400（代表）
【事務連絡者氏名】	財務経理部部长 清水 寛
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次	第32期 第2四半期 連結累計期間	第33期 第2四半期 累計期間	第32期
会計期間	自 2021年4月1日 至 2021年9月30日	自 2022年4月1日 至 2022年9月30日	自 2021年4月1日 至 2022年3月31日
売上高 (千円)	1,206,066	1,435,411	2,525,924
経常利益 (千円)	108,810	124,023	371,482
四半期(当期)純利益又は親会社株主に帰属する四半期純利益 (千円)	82,545	90,469	268,264
持分法を適用した場合の投資利益 (千円)	-	-	-
資本金 (千円)	172,198	172,198	172,198
発行済株式総数 (株)	9,800,000	9,800,000	9,800,000
純資産額 (千円)	1,822,559	1,946,776	1,995,643
総資産額 (千円)	2,172,511	2,286,023	2,458,709
1株当たり四半期(当期)純利益 (円)	8.47	9.42	27.70
潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益 (円)	-	-	-
1株当たり配当額 (円)	-	-	15.00
自己資本比率 (%)	83.9	85.2	81.2
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	310,408	119,202	659,590
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	97,054	39,261	206,085
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	204,306	143,182	247,310
現金及び現金同等物の四半期末(期末)残高 (千円)	1,130,411	1,285,674	1,348,916

回次	第32期 第2四半期 連結会計期間	第33期 第2四半期 会計期間
会計期間	自 2021年7月1日 至 2021年9月30日	自 2022年7月1日 至 2022年9月30日
1株当たり四半期純利益 (円)	3.14	2.01

- (注) 1. 当社は、2021年10月1日付にて当社の完全子会社であった日本データビジョン株式会社を吸収合併(簡易合併・略式合併)したことにより連結子会社が存在しなくなり、非連結決算会社となっております。このため、主要な経営指標等の推移については、第32期第2四半期連結累計期間は四半期連結財務諸表について、第33期第2四半期累計期間は四半期財務諸表について、第32期は財務諸表について記載しております。
2. 持分法を適用した場合の投資利益については、関連会社がないため記載しておりません。
3. 第32期第2四半期連結累計期間、第33期第2四半期累計期間及び第32期の潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2【事業の内容】

当第2四半期累計期間において、当社が営む事業の内容について、重要な変更はありません。また、主要な関係会社は存在せず、異動もありません。

なお、第1四半期累計期間より報告セグメントの区分を一部変更しております。

詳細は、「第4 経理の状況 1 四半期財務諸表 注記事項（セグメント情報等）」に記載のとおりであります。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第2四半期累計期間において、新たな事業等のリスクの発生、または、前事業年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについての重要な変更はありません。

2【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期会計期間の末日現在において判断したものであります。

当社は、2021年10月1日付にて当社の完全子会社であった日本データビジョン株式会社を吸収合併（簡易合併・略式合併）したことにより連結子会社が存在しなくなり、非連結決算会社となっております。なお、当第2四半期累計期間は、前年同四半期の単体決算数値が存在しないため、前年同四半期の数値及びこれに係る対前年同四半期増減率の比較分析は行っていません。

なお、第1四半期累計期間から、従前のメディア&ソリューション事業において行っていたソリューションサービスについて、その内容が採用支援事業におけるツール販売と極めて近似であり、事業としての親和性が高いことから、当該ソリューションサービスを採用支援事業におけるツール販売と集約し、事業効率の向上を図る事を目的として報告セグメントを跨いで一部事業組織を再編しており、報告セグメントの一部組替を行っております。

(1) 経営成績の状況

全般的事業の状況

当第2四半期累計期間におけるわが国経済は、引き続き大企業及び製造業と非製造業とで業況が2極化を示しております。

大企業及び製造業においては、世相的に若干の業況回復が見込まれていましたが、原材料コスト高や物価上昇懸念を背景に非鉄金属や電気機械等の分野を中心に業況が更に悪化しております。

非製造業においては、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響緩和が徐々に進み、飲食サービスや個人サービスの分野を中心に業況の良化が継続しております。

なお、急激な環境変化に伴い生産状況や交易条件が悪化した事に加えて、原材料コスト高や物価上昇懸念が影響を強めており、未だ国内や海外での需給判断に大きな変化が生じている訳ではありませんが、世界経済の減速懸念は拭いきれない状況です。

その反面、設備投資はストックの不足感から、継続して拡大傾向を示しております。

先行きの極めて不透明な状況が続きますが、原材料コスト高や物価上昇懸念があるものの、部材調達難の解消や自動車減産の緩和、及び新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響緩和の継続を念頭として、大企業及び製造業においては好転が見込まれる傾向にあります。

しかしながら、非製造業では原材料コスト高や物価上昇懸念から若干の業況悪化が見込まれる傾向にあります。

当社の事業領域である人材ビジネス市場の状況は、2022年8月の完全失業率（季節調整値）は2.5%（前年同月2.8%、前月2.6%）、有効求人倍率（季節調整値）は1.32倍（前年同月1.14倍、前月1.29倍）、新規求人倍率（季節調整値）は2.32倍（前年同月1.97倍、前月2.40倍）の国内雇用状況であり、短期的な景況感により振れ幅はあるものの、引き続き緩やかな上昇傾向にあります。

このような環境の下でも、求人企業と求職者に最適なマッチング機会を提供する人材ビジネスの社会的意義は引き続き極めて高いものと認識しております。当社は、「WORKS for your dreams!（楽しく生き活きと働き、夢を実現できる社会を）」というビジョンの下、「人と企業の可能性を具現化し、幸せを追求する。」というミッションを掲げて事業を運営してまいりました。

なお、事業体質の強化を鑑み、「持続的成長のための構造改革」及び「事業構造改革」に継続して取り組んでおります。

主力事業の一つであるメディア&ソリューション事業におきましては、主要顧客が自動車分野を中心とした製造業であることから、大企業及び製造業における業況悪化の継続の影響が大きく、セグメント損失となりました。

しかしながら、当該自動車分野を中心とした製造業を取り巻く業況の悪化は、製品供給等の鈍化による需要超過の市況を鑑み、部材調達難の解消や自動車減産の緩和に伴い好転する短期的な状況と捉えており、日銀短観における業況判断でも自動車分野等の一部に改善傾向が示され、労働需要超過の状況が継続している背景から、製造業の業況の反転を的確に捉えるべく、引き続き業績の回復に向けて情報収集と営業活動等の徹底を図っております。

主力事業の一つである人材紹介事業におきましては、労働市場の上昇傾向の継続に対してコンサルタントの増員と生産性の低下の抑制を図っており、当該セグメント業績は順調に推移しました。

採用支援事業におきましては、前事業年度までの事業構造改革を継続して収益体質の更なる改善を図ると共に、拡販を進めており、期中での時節による売上高の変動傾向はあるものの、当該セグメントの業績は堅調に推移しております。

これらの結果、当第2四半期累計期間の業績は、売上高1,435,411千円、営業利益122,504千円、経常利益124,023千円、四半期純利益90,469千円となりました。

事業部門の営業概況

第1四半期会計期間より報告セグメントの区分を変更しております。

従前のメディア&ソリューション事業において行っていたソリューションサービスについて、その内容が採用支援事業におけるツール販売と極めて近似であり、事業としての親和性が高いことから、当該ソリューションサービスを採用支援事業におけるツール販売と集約し、事業効率の向上を図る事を目的として報告セグメントを跨いで一部事業組織を再編しており、報告セグメントの一部組替を行っております。

当該変更により、従来の方法によった場合に比べ、当第2四半期累計期間の売上高がメディア&ソリューション事業で19,434千円減少、採用支援事業で19,434千円増加し、メディア&ソリューション事業でセグメント損失()が4,429千円増加、採用支援事業でセグメント利益が4,429千円増加しております。

(イ)メディア&ソリューション事業

主力事業の一つであるメディア&ソリューション事業におきましては、主要顧客が自動車分野を中心とした製造業であることから、大企業及び製造業における、原材料コスト高、中国上海を中心としたロックダウン(都市封鎖)等による受注減や部材調達難、及び自動車の減産の影響が継続しており、自動車分野の主要既存顧客を中心に主力サービスである「工場WORKS」における引き合い及び受注が継続して落ち込んでおり、事業効率及び収益性の悪化が継続しております。

しかしながら、当社では当該業況の悪化は、製品供給等の鈍化による需要超過の市況を鑑み、部材調達難の解消や自動車減産の緩和に伴い好転する短期的な状況と捉えており、日銀短観における業況判断でも製造業の改善傾向が示され、労働需要超過の状況が継続している背景から、一定の底打感も存在しており、製造業の業況の反転を的確に捉えるべく、引き続き業績の回復に向けて情報収集と営業活動等の徹底を継続しております。

なお、中長期的な事業体質の強化を図る為、認知度向上の施策やサービス向上の開発等の戦略的投資を継続しつつ、適宜適切な費用投下の徹底を継続しております。

これらの結果、同事業の当第2四半期累計期間の業績は、売上高512,164千円、セグメント損失124,014千円となりました。

また、セグメントの売上高につきましては、外部顧客への売上高を記載しております(以下同様)。

なお、当事業年度より非連結決算に移行したことから、セグメント別の経営成績について、前年同四半期との比較は行っておりません(以下同様)。

(ロ)人材紹介事業

主力事業の一つである人材紹介事業におきましては、労働市場は需要超過が緩やかな上昇傾向を継続しており、これに対応するためコンサルタントの増員を図っており、受注の増加に繋がっております。

また、KPIマネジメントやセクター別チーム戦略等によるコンサルタントの早期戦力化とレベルアップ及び生産性向上への取り組みが定着化し、コンサルタントの増員に伴う生産性の低下を抑制しております。

これらの結果、同事業の当第2四半期累計期間の業績は、売上高743,265千円、セグメント利益232,501千円となりました。

(ハ)採用支援事業

採用支援事業におきましては、短期的な景況感による受注の振れ幅は他の事業に比較して小さく、前事業年度までの事業構造改革の継続による収益体質の改善を受けて、収益体質を保持した上での拡販を着実に進めております。

なお、事業体質の強化を鑑みた事業構造改革は継続して推進しております。

これらの結果、同事業の当第2四半期累計期間の業績は、売上高179,981千円、セグメント利益14,018千円となりました。

(2) 財政状態の状況

(資産の部)

当第2四半期会計期間末における総資産は、前事業年度末に比べて172,685千円減少し、2,286,023千円(前期末比7.0%減)となりました。これは主として、配当金の支払、法人税等の納付、経営成績を反映した結果、現金及び預金が63,242千円減少、売掛金が55,490千円減少、減価償却等によりソフトウェアが50,873千円減少したことによるものです。

(負債の部)

当第2四半期会計期間末における負債合計は、前事業年度末に比べて123,819千円減少し、339,246千円（前期末比26.7%減）となりました。これは主として、納付、支払及び賞与等の支給に伴い、買掛金が30,707千円減少、未払法人税等が59,354千円減少、賞与引当金が10,303千円減少、その他流動負債が25,040千円減少したことによるものです。

（純資産の部）

当第2四半期会計期間末における純資産は、前事業年度末に比べて48,866千円減少し、1,946,776千円（前期末比2.4%減）となりました。これは、譲渡制限付株式（RS）の付与及び処理により資本剰余金が24,717千円減少、配当金の支払や経営成績等を反映して利益剰余金が53,366千円減少、譲渡制限付株式（RS）の付与により自己株式が29,217千円減少したことによるものです。

(3) キャッシュ・フローの分析

当第2四半期会計期間末における現金及び現金同等物（以下「資金」という）の残高は、前事業年度末に比べて63,242千円減少し、1,285,674千円となりました。当第2四半期累計期間におけるキャッシュ・フローの状況は以下のとおりです。

なお、前事業年度の第3四半期会計期間より非連結決算へ移行した事から、キャッシュ・フローの状況について、前年同四半期との比較は行っておりません。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果、得られた資金は119,202千円となりました。主な増加要因は、税引前四半期純利益124,023千円、減価償却費73,951千円、売上債権の減少55,490千円によるものです。主な減少要因は、法人税等の支払78,860千円によるものです。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果、使用した資金は39,261千円となりました。主な要因は、無形固定資産の取得による支出31,927千円によるものです。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果、使用した資金は143,182千円となりました。要因は、配当金の支払額143,182千円によるものです。

(4) 重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

前事業年度の有価証券報告書に記載した「経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析」中の会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定の記載について重要な変更はありません。

(5) 当第2四半期累計期間の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

（売上高）

当第2四半期累計期間の売上高は、1,435,411千円となりました。

主力事業の一つであるメディア&ソリューション事業におきましては、主要顧客が自動車分野を中心とした製造業である事から、大企業及び映像業における、原材料コスト高、中国上海を中心としたロックダウン（都市封鎖）等による受注減や部材調達難、及び自動車の減産の影響が大きく響き、自動車分野の主要既存顧客を中心に主力サービスである「工場WORKS」における引き合い及び受注が大きく落ち込みましたが、今後の持続的な成長を図る為の新規顧客の開拓により相応の売上高は概ね確保でき、当該事業セグメントの売上高は512,164千円となりました。

主力事業の一つである人材紹介事業におきましては、労働市場は需要超過が緩やかな上昇傾向を継続しており、これに対応するためコンサルタントの増員を図った事から、当該事業セグメントの売上高は743,265千円となりました。

採用支援事業におきましては、前事業年度までの事業構造改革の継続による収益体質の改善を受けて、収益体質を保持した上での新規顧客の開拓に注力した事から、当該事業セグメントの売上高は179,981千円となりました。

なお、セグメントの売上高につきましては、外部顧客への売上高を記載しております。

(売上総利益)

当第2四半期累計期間の売上総利益は、1,031,575千円となりました。売上総利益率は71.9%となりました。

これは主に、売上高の増加に伴い売上原価が比例的に増加すると共に、メディア&ソリューション事業における中長期的な事業の効率化やサービスのセキュリティ強化を目的とした新基盤(プラットフォーム)の運用に伴い減価償却費が増加した事によるものです。

(営業利益)

当第2四半期累計期間の営業利益は、122,504千円となりました。営業利益率は8.5%となりました。

これは主に、売上総利益の増加に対して販売費及び一般管理費の増加が適切に抑制できたことによるものです。なお、当社では適宜適切な費用投下により販売費及び一般管理費の増加抑制に努めておりますが、メディア&ソリューション事業の主要顧客である自動車分野を中心とした製造業を支える労働力がコロナ禍の影響により海外からの流入が長きに亘り止まり、業況悪化や減産の局面でも国策による助成金が限られた国内労働力の確保に用いられて流動化が鈍化している背景から、広告費等が増加しております。

(経常利益)

当第2四半期累計期間の経常利益は、124,023千円となりました。経常利益率は8.6%となりました。

これは主に、営業利益となったことによるものです。

(四半期純利益)

当第2四半期累計期間の四半期純利益は、90,469千円となりました。四半期純利益率は6.3%となりました。

これは主に、経常利益となったことによるものです。

(収益性の分析)

当社では、「目標とする経営指標」について利益目標(営業利益、経常利益、当期純利益)に加えて、株主資本の有効活用及び資産の効率的な活用を測る指標としてROE(自己資本当期純利益率)を重視しております。

ROE(自己資本当期純利益率)を指標として重視する意図は、当該指標が株主の持分に対する投資収益率を表し経営者が株主に対して果たすべき責務を表した指標と見ることができること、また、株主に帰属する配当可能利益の源泉となるものであり配当能力を測定する指標として使われること、これらのことから株式の投資尺度としても重要であると認識するからであります。

当第2四半期累計期間のROE(自己資本四半期純利益率)は、4.6%となりました。

なお、ROE(自己資本四半期純利益率)は下記の計算式により算出しております。

$$\text{ROE(自己資本四半期純利益率)} = \frac{\text{四半期純利益}}{(\text{期首自己資本} + \text{期末自己資本}) \div 2}$$

(6) 経営方針・経営戦略等

当第2四半期累計期間において、当社が定めている経営方針・経営戦略等について重要な変更はありません。

(7) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当第2四半期累計期間において、当社が優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題について重要な変更はありません。

(8) 研究開発活動

該当事項はありません。

3【経営上の重要な契約等】

当第2四半期会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	19,000,000
計	19,000,000

【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間末現在発行数(株) (2022年9月30日)	提出日現在発行数(株) (2022年11月11日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	9,800,000	9,800,000	東京証券取引所 スタンダード市場	単元株式数は100株 であります。
計	9,800,000	9,800,000	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額 (千円)	資本準備金残 高(千円)
2022年7月1日～ 2022年9月30日	-	9,800,000	-	172,198	-	145,569

(5)【大株主の状況】

2022年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
株式会社アミューズキャピタル	東京都中央区銀座三丁目15番8号	2,921,800	30.22
株式会社アミューズキャピタルイン ベストメント	東京都中央区銀座三丁目15番8号	750,000	7.75
日本マスタートラスト信託銀行株式 会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	508,000	5.25
株式会社A.C企画	東京都中央区銀座三丁目15番8号	500,000	5.17
中山 晴喜	東京都港区	400,000	4.13
有馬 誠	東京都文京区	200,000	2.06
株式会社日本カストディ銀行(信託 口)	東京都中央区晴海一丁目8番12号	143,100	1.48
楽天証券株式会社	東京都港区南青山二丁目6番21号	133,000	1.37
松本 和之	兵庫県姫路市	128,847	1.33
中村 俊一	東京都小金井市	100,000	1.03
計	-	5,784,747	59.84

(注) 上記日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は299,400株、株式会社日本カストディ銀行(信託口)の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は107,400株であります。

(6) 【議決権の状況】
【発行済株式】

2022年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 134,200	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 9,588,500	95,885	-
単元未満株式	普通株式 77,300	-	-
発行済株式総数	9,800,000	-	-
総株主の議決権	-	95,885	-

【自己株式等】

2022年9月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数 に対する所有株 式数の割合(%)
(自己保有株式) 株式会社インターワークス	東京都港区西 新橋一丁目6 番21号	134,200	-	134,200	1.36
計	-	134,200	-	134,200	1.36

(注) 当社は、2022年7月15日開催の取締役会にて譲渡制限付株式として自己株式の処分を行う決議をし、2022年8月15日付で77,773株の自己株式の処分を行っております。

2 【役員の状況】

該当事項はありません。

第4【経理の状況】

1．四半期財務諸表の作成方法について

(1) 当社の四半期財務諸表は、「四半期財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第63号）に基づいて作成しております。

(2) 当社は、2021年10月1日付にて当社の完全子会社であった日本データビジョン株式会社を吸収合併（簡易合併・略式合併）したことにより連結子会社が存在なくなり、非連結決算会社となっております。なお、当第2四半期累計期間は、前年同四半期の単体決算数値が存在しないため、四半期損益計算書の比較情報は記載しておりません。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期会計期間（2022年7月1日から2022年9月30日まで）及び第2四半期累計期間（2022年4月1日から2022年9月30日まで）に係る四半期財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による四半期レビューを受けております。

3．四半期連結財務諸表について

当社は子会社がありませんので、四半期連結財務諸表を作成しておりません。

1【四半期財務諸表】

(1)【四半期貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当第2四半期会計期間 (2022年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,348,916	1,285,674
売掛金	297,171	241,680
その他	52,421	59,386
貸倒引当金	6,975	6,877
流動資産合計	1,691,534	1,579,864
固定資産		
有形固定資産	56,506	58,595
無形固定資産		
ソフトウェア	488,996	438,123
その他	1,023	1,023
無形固定資産合計	490,019	439,146
投資その他の資産		
その他	220,649	208,416
貸倒引当金	0	0
投資その他の資産合計	220,649	208,416
固定資産合計	767,175	706,159
資産合計	2,458,709	2,286,023
負債の部		
流動負債		
買掛金	100,254	69,547
未払金	108,356	97,577
未払法人税等	92,721	33,366
契約負債	2,025	14,210
返金負債	6,987	7,169
賞与引当金	33,728	23,425
その他	118,991	93,950
流動負債合計	463,066	339,246
負債合計	463,066	339,246
純資産の部		
株主資本		
資本金	172,198	172,198
資本剰余金	593,886	569,169
利益剰余金	1,309,198	1,255,832
自己株式	79,639	50,422
株主資本合計	1,995,643	1,946,776
純資産合計	1,995,643	1,946,776
負債純資産合計	2,458,709	2,286,023

(2) 【四半期損益計算書】
【第2四半期累計期間】

(単位：千円)

当第2四半期累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)	
売上高	1,435,411
売上原価	403,836
売上総利益	1,031,575
販売費及び一般管理費	909,070
営業利益	122,504
営業外収益	
受取利息	7
未払配当金除斥益	157
受取家賃	1,115
助成金収入	400
その他	83
営業外収益合計	1,764
営業外費用	
為替差損	120
その他	124
営業外費用合計	245
経常利益	124,023
税引前四半期純利益	124,023
法人税、住民税及び事業税	23,101
法人税等調整額	10,453
法人税等合計	33,554
四半期純利益	90,469

(3)【四半期キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	当第2四半期累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	
税引前四半期純利益	124,023
減価償却費	73,951
貸倒引当金の増減額(は減少)	97
賞与引当金の増減額(は減少)	10,303
返金負債の増減額(は減少)	181
受取利息及び受取配当金	7
為替差損益(は益)	120
未払配当金除斥益	157
売上債権の増減額(は増加)	55,490
仕入債務の増減額(は減少)	30,707
未払金の増減額(は減少)	3,786
未払消費税等の増減額(は減少)	11,941
その他	1,291
小計	198,056
利息及び配当金の受取額	6
法人税等の支払額	78,860
営業活動によるキャッシュ・フロー	119,202
投資活動によるキャッシュ・フロー	
有形固定資産の取得による支出	6,988
無形固定資産の取得による支出	31,927
敷金及び保証金の差入による支出	345
投資活動によるキャッシュ・フロー	39,261
財務活動によるキャッシュ・フロー	
配当金の支払額	143,182
財務活動によるキャッシュ・フロー	143,182
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	63,242
現金及び現金同等物の期首残高	1,348,916
現金及び現金同等物の四半期末残高	1,285,674

【注記事項】

(四半期損益計算書関係)

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

当第2四半期累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)	
支払手数料	40,980千円
給与手当	327,169
役員報酬	36,265
賞与及び賞与引当金繰入額	60,340
貸倒引当金繰入額	97
広告宣伝費	201,550
減価償却費	8,332
法定福利費	50,320

(四半期キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は下記のとおりであります。

当第2四半期累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)	
現金及び預金勘定	1,285,674千円
預入期間が3か月を超える定期預金	-
現金及び現金同等物	1,285,674

(株主資本等関係)

当第2四半期累計期間(自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)

1. 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
2022年5月13日 取締役会	普通株式	143,835	15.00	2022年3月31日	2022年5月31日	利益剰余金

2. 基準日が当第2四半期累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期会計期間の末日後となるもの

該当事項はありません。

3. 株主資本の著しい変動

当社は、2022年7月15日付開催の取締役会の決議に基づき、2022年8月15日付で取締役に対する譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分、及び従業員に対する譲渡制限付株式の割当に伴う自己株式の処分による払込手続を完了しました。処分した当社普通株式数は77,773株、処分価額は1株につき367円、処分価額の総額は28,542千円です。

この結果、前年度実施の譲渡制限付株式の処理と併せて、当第2四半期累計期間において資本剰余金が24,717千円減少、自己株式が29,217千円減少して、当第2四半期会計期間末における資本剰余金が569,169千円となり、自己株式が50,422千円となっております。

(持分法損益等)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当第2四半期累計期間(自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報並びに収益の分解情報

(単位:千円)

	報告セグメント				調整額 (注)1	四半期損益 計算書計上額 (注)2
	メディア&ソ リューション 事業	人材紹介事業	採用支援事業	計		
売上高						
広告販売	512,164	-	-	512,164	-	512,164
職業紹介	-	743,265	-	743,265	-	743,265
代行サービス	-	-	154,452	154,452	-	154,452
ツール販売	-	-	25,528	25,528	-	25,528
顧客との契約から生じる収益	512,164	743,265	179,981	1,435,411	-	1,435,411
外部顧客への売上高	512,164	743,265	179,981	1,435,411	-	1,435,411
セグメント間の内部売上高 又は振替高	-	-	-	-	-	-
計	512,164	743,265	179,981	1,435,411	-	1,435,411
セグメント利益又は損失()	124,014	232,501	14,018	122,504	-	122,504

(注)セグメント利益又は損失()は、四半期損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントの変更等に関する情報

従前よりメディア&ソリューション事業において行っていたソリューションサービスについて、その内容が採用支援事業におけるツール販売と極めて近似であり、事業としての親和性が高いことから、当該ソリューションサービスを採用支援事業におけるツール販売と集約し、事業効率の向上を図る為に報告セグメントをまたいで一部事業組織を再編しており、報告セグメントの一部組替を行っております。

当該変更により、従来の方法によった場合に比べ、当第2四半期累計期間の売上高がメディア&ソリューション事業で19,434千円減少、採用支援事業で19,434千円増加し、メディア&ソリューション事業でセグメント損失()が4,429千円増加、採用支援事業でセグメント利益が4,429千円増加しております。

3. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

該当事項はありません。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりであります。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当第2四半期累計期間 (自 2022年4月1日 至 2022年9月30日)
(1) 1株当たり四半期純利益	9.42円
(算定上の基礎)	
四半期純利益(千円)	90,469
普通株主に帰属しない金額(千円)	-
普通株式に係る四半期純利益(千円)	90,469
普通株式の期中平均株式数(株)	9,608,708

(注) 当第2四半期累計期間の潜在株式調整後1株当たり四半期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

2【その他】

該当事項はありません。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

2022年11月11日

株式会社インターワークス
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人
東京事務所

指定有限責任社員 公認会計士 岡野 隆樹
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 上野 陽一
業務執行社員

監査人の結論

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている株式会社インターワークスの2022年4月1日から2023年3月31日までの第33期事業年度の第2四半期会計期間（2022年7月1日から2022年9月30日まで）及び第2四半期累計期間（2022年4月1日から2022年9月30日まで）に係る四半期財務諸表、すなわち、四半期貸借対照表、四半期損益計算書、四半期キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社インターワークスの2022年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項が全ての重要な点において認められなかった。

監査人の結論の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。四半期レビューの基準における当監査法人の責任は、「四半期財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

四半期財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠して四半期財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

四半期財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき四半期財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

四半期財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した四半期レビューに基づいて、四半期レビュー報告書において独立の立場から四半期財務諸表に対する結論を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に従って、四半期レビューの過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対する質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続を実施する。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。
- ・ 継続企業の前提に関する事項について、重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められると判断した場合には、入手した証拠に基づき、四半期財務諸表において、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠して、適正に表示されていないと信じさせる事項が認められないかどうか結論付ける。また、継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、四半期レビュー報告書において四半期財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する四半期財務諸表の注記事項が適切でない場合は、四半期財務諸表に対して限定付結論又は否定的結論を表明することが求められている。監査人の結論は、四半期レビュー報告書日までに入手した証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 四半期財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期財務諸表の作成基準に準拠していないと信じさせる事項が認められないかどうかとともに、関連する注記事項を含めた四半期財務諸表の表示、構成及び内容、並びに四半期財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示していないと信じさせる事項が認められないかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した四半期レビューの範囲とその実施時期、四半期レビュー上の重要な発見事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1. 上記の四半期レビュー報告書の原本は当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。
2. XBR Lデータは四半期レビューの対象には含まれていません。